

**水資源・環境学会・岩手大学地域連携センター共催**  
**「地域づくりと水循環」報告** **松岡勝実（岩手大学）**

2006年度の研究大会は6月3日（土）初夏の涼風と晴天に恵まれて、盛岡市で開催された。今回の研究大会は、水資源・環境学会の研究企画委員会と岩手大学地域連携推進センターの地域司法部門のコラボレーションで開催が実現した。午前中は2会場で「環境再生と地域づくり」と「環境教育と地域づくり」のテーマで研究発表のセッションが同時進行し、午後は大会場で「地域づくりと水循環」のテーマのもと研究発表と総合討論の2つのセッションが開かれた。今回は発表者の総数17名、総合討論でのパネリストが4名、参加者は午前中70名、午後50名ほどで延べ120名になり、これまでの研究大会としては最大規模になった。すべてのプログラムが盛況のうちに予定通り終了し、夕方からは、盛岡市内に場所を移し恒例の懇親会となった。岩手大学の学長、副学長も参加し、和やかな雰囲気の中で交流の場となった。なお研究大会の様子は岩手日報によって地元で紹介された。

また関連の行事として、八幡平市の旧松尾鉦山や花巻市の酒蔵を見学するバス・ツアーが行われた。26名の参加者のうち8名の学会員が合流した。以下、各セッションの内容を簡単に紹介する。なお今回の報告については、各セッションの座長である、若井 郁次郎（大阪産業大学）、玉 真之介（岩手大学）、伊藤達也（金城学院大学）の各氏から協力をいただいた。

### **地域づくりと環境再生**

このセッションでは、5件の研究報告が行われた。最初の4件は、平成11年（1999）年に発覚した青森・岩手県境における大規模不法投棄事件に関連し、岩手県の行政対応、不法投棄現場の環境再生事業にかかわる社会経済的評価や環境経済評価ならびに環境再生への取り組みについての現状・研究報告であった。最後の1件は、廃棄物処理施設の差止裁判からみた地下水汚染の法的救済の現状と課題の研究報告であった。いずれも国内で類似事件が多発している現状を考慮すると、最重要な解決すべき課題であり、これら5件の研究報告の成果は、理論的だけでなく実践的にも有用であるといえるものであった。

産業廃棄物の不法投棄は、業者が倒産し、後始末に行政が代行するというパターンが見られ、結局、国民の貴重な税が使われることになる。このパターンをなくすための広域的連携や環境政策的工夫が痛感された。

そのような産業廃棄物不法投棄現地の環境再生事業に対して、県民、行政、企業などが参加し、投資対効果の情報を共有して広く議論し合意形成を図ることも重要な公共政策の課題となっている。これに応えるため、地域の主体である地元県民の協力により選択型実験やCVM（仮想評価法）を用いた便益の定量的把握が行われた。今後、この研究成果が社会的に利用され、公共事業の政策評価へと発展することを期待する。

他方、岩手大学の総力をあげて産業廃棄物不法投棄現地の環境再生の取り組みが行われ

ており、従来の研究・技術開発の枠組みを超え、その成果を講演会やシンポジウムという形式で県民や企業などへの社会還元が行われている。さらに、地元自治体に対しても積極的に提案や助言も行われている。この大学の姿勢こそ、本来の大学像であるといえる。

産業廃棄物は、適地で最終処分される場合であっても周辺住民に水質汚濁、地盤崩壊、交通事故発生などさまざまなリスクを及ぼす。このため、生活の場において訴訟が起こっている。近年では、身体権としての浄水享受権や平穏生活権としての浄水享受権といった新しい人格権の解釈が生まれ、これらにより環境リスクに曝されよう、あるいは曝されている住民の早急な救済の社会的ニーズが高まりつつある。

以上 5 件の研究報告は、最新性があり充実した内容であった。このため予定は配分時間を超えて活発に討議が行われる場面もあった。

### 地域づくりと環境教育

セッション 2 では、5 つの報告に対して質疑が行われた。

最初は、町内会による盛岡市「高松公園」の水質浄化と環境再生についての報告で、地域住民による行政や小中学生を巻き込んだ水質浄化と炭焼き、ホテルの再生など多彩な内容が紹介され、昨年ついにホテルが復活した話は感動的だった。

2 番目は、宮沢賢治の童話や短歌、紀行文など 98 編のテキストに出てくる動物を丹念に洗い出して、賢治がどのような動物生態観を持っていたかを分析したもので、賢治が「食う食われる食物連鎖の関係」に注目していたことが報告された。

3 番目は、バングラディッシュを対象地として貧困問題の克服が環境問題と関係するのかを考察したもので、環境条件の良いところで経済格差と貧困問題の深刻化が見られ、環境条件の悪いところで貧困問題が深刻となっていない事実が興味深い点であった。

4 番目には、小学校の教科書に出てくる環境に関する記述が陸と海の物質循環を単純化し、実際の複雑でスケールの大きい循環の構造を的確に伝えていないことについて報告したもので、環境教育が陥りやすい問題点を指摘したものだだった。

5 番目は、沖縄の座間味村における環境を全面に出した行政がかえって環境問題を深刻している事実や地元のダイバーによる取組と行政との連携をめぐる問題など、自然の許容限度と観光産業との両立の難しさが報告された。

テーマとの関連では、やはり住民運動と行政との連携が課題として浮かび上がった。

### 地域づくりと水循環

基調講演では、北上川の地理的、河川工学的特徴、北上川の治水・利水の歴史、近年の清流事業の概要、北上川流域連携交流会を通じた NPO 活動の体験等通じて、河川と我々とのつながりがさまざまな観点から論じられた。さらに、農業用水とか工業用水とか発電とか、従来の河川の利用にとどまらない、福祉、医療、教育といった新たな視点の河川の活用、国際的な視点での水の大切さ等についても論及されたことは印象的であった。そして、

「川は命を守り、食べ物をつくる。ある程度の豊かさがあるからこそ、環境に思いが至る」と日本の河川の恵みが強調された。

2 番目の研究発表では、北上川河口域に広がるヨシ原について、ヨシ原生態系は生物学的・化学的に機能について観察したうえで、地域社会(河口域と上流域)の人々のヨシ原に対する反応の相違にふれ、資源としてのヨシ原管理のあり方を、生態学的存在としてだけでなく、社会科学的人文科学的存在としても位置づけ、自然と人間と社会を結びつけた視点から管理する必要があると結論づけた。

3 番目の報告は、岩手県の鹿妻穴堰土地改良区の事例を通じて、水源林が同時に財産林としての性格を有する経営展開の条件について、詳細な実証的データに基づいて分析したものであった。

4 番目の報告は、水資源開発・利用の現状を確認した上で、今日なおダム・河口堰の建設が続く理由を明らかにし、水資源政策においてダム・河口堰でなくてはならないと考えられている理由とその問題点を様々な角度から明らかにした。利水の問題、そして治水の問題でさえも究極的には人的な判断(水政策のあり方)に強く左右されるということが浮かび上がった。

## 総合討論

はじめに各パネリストがセッション1～3の発表、議論の概要についてのまとめの報告を行った。そこでは、「青森・岩手県境の大規模不法投棄事件の概要と対応」(セッション1)、「水を通した人間と環境のつながりと再生」(セッション2)、「水資源の利用をめぐる人と川との関係のあり方」(セッション3)の取りまとめが行われ、総合討論への糸口が示された。

その後、フロアからパネリストに対しての質問が提出され、議論が展開された。個々の質問の内容は省略するが、全体の議論を貫いていたのは「これまでの人と水との関わりの再確認と今後の関わりのあり方」をめぐるものであったと言える。流域という枠組みの中での人と自然の関係のとり方、人と人との関わりのあり方などをめぐる議論が活発に展開され、中でも、北上川をめぐる地域住民、NPOの活動の展開や、東日本を水辺空間で貫く人と人との関係の構築とその困難さ等、より具体的な話題を中心にしての議論が行われたことは、議論の深まりの点でよかったと考えている。議論の後半でフロアから、こうした水と人間の関わりを考えていく際に「公のあり方」が一つのポイントになるのでは、という意見が提出され、それをめぐっての更なる議論展開が望まれたが、時間の制約によって果されなかったことが残念であった。

## 関連特別行事

岩手大学は、環境教育と連携し全学的知財教育に取り組んでいる。知財教育は、先端的な研究を見極めていく作業と、伝統的な技術に目を向けていく2つの方向性がある。今回の現地研修会は、現代GPの基礎的教育の一環として、旧松尾鉦山新中和処理施設を訪ね

て環境と環境技術の問題に目を向けるとともに、石鳥谷の酒蔵、歴史民族資料館を見学し、伝統技術の掘り起こしを通じて、知財とのかかわりを考えていく場とした。

当日は、晴天にめぐまれ八幡平の新緑を存分に満喫しながら、現地施設に到着した。日曜日なので、当初は詳細な見学を予定していなかったが、施設側の好意で回収、中和、分離等の各用途槽、および貯泥ダム等の案内を受け詳細に見学することができた。かつて経済発展の象徴であった松尾硫黄鉱山が廃鉱となり、北上川が酸水化し大きな社会問題となって、昭和51年にこの施設が生まれた。現在も1年中24時間稼働している。多くの登山客が訪れる八幡平からこの施設を見下ろすとき、巨額の経費をかけて、崩れた自然バランスを科学技術で回復しなければならぬ人間の愚かさを感じずにはいられなかった。同時に、知的財産権は科学技術を保護育成していく役割を果たしているが、そこには人間と環境との関わりを見極める視点が必要であると思われた。

八幡平を後にして、花巻市石鳥谷の酒造り伝承館に向かった。石鳥谷は、三大杜氏の1つ南部杜氏発祥の地である。岩手の酒も北上川を中心とした切れのある水が命であるといわれている。杜氏の1人は語る。「酒造りは水が非常に大事。そして水は怖い。同じ井戸から汲んでいるのに、年によって微妙に成分が異なる。突然水温が上昇した年があった。近くの川で始まった架橋工事が原因ではないかと思った。水は生き物だから」

伝統的な酒造りの技術は現在では機械化されている部分が多い。発酵技術は、特許を通じてさらにさまざまな関連の商品を生み出している。しかしながら、酒造りの技術向上の基礎には、岩手の酒のブランドイメージを高めている自然の恵みのあることも忘れてはならないだろう。こうした点も含めて、帰りの車中では、参加者がそれぞれ感想を述べ合い無事に散会することができた。